

エーゲ海をめぐる

この「エーゲ海とめぐって」と次の「ペライエウスからアケデメイアへ」は実際に定期試験に出した問題です。ギリシア世界はロゴス（言葉）に対話（ディアロゴス）の世界です。古代ギリシアの雰囲気を感じてもらえればと思いながらつくりました。学生になったつもりで考えてみましょう。

次の架空の会話に登場する（全てが話し手として登場するわけではない）A～Pが誰かを答よ。また【1】～【15】に適切なカタカナを入れ、①～⑦の下線部とⅠとⅡの二重下線部についての間に答えよ。また最後の間に答えよ。

A：“エーゲ海をめぐる古代ギリシア文化を考える会”にご参加の皆さま、私为本日の会の幹事を務めますAでございます。この会の幹事兼進行役をするようにとの木戸君からの強い要請がありました。古代ギリシア最大の学者との評価をいただいておりますが、考えてみれば、この会に参加なさっている方々の中では私が一番の若輩者ですから、仕方なくお引き受けしました。いたりませんが、よろしくご協力をお願いします。それはそうと、皆さまお急ぎください。まもなく船が出ます。時間がございません。皆さんご乗船くださいましたか。・・・それではここ、アテネのペライエウス港を出船いたします。船はまずは東にむかいエーゲ海を横断、美しい島々を眺めながら小アジアの【1】に向かう予定です。ご覧下さい。右手かなたに【2】の海峡が見えますでしょうか。【2】というとアテネ出身の方々は懐かしい想いをお持ちではないでしょうか。なにしろ、あの海戦はペルシア戦争の勝利を決定づけた輝かしい戦いでしたからね。今日、私どもがはじめにとる航路は、ちょうどあの戦争の初めの戦いの時に、ペルシアの海軍の一部がギリシアに向かってやってきたコースを逆にたどることになります。どうでしょう、Bさん。あなたは「歴史」の中でペルシア戦争のことをお書きになっていますね。何かお話いただけませんか。

B: 私はあの戦いを「自由と奴隷の戦い」と解釈しました。確かにペルシアは大帝国でした。それに比べてギリシア世界には小さなポリスしかありませんでした。でもペルシアではペルシア大王以外はすべて奴隷です。それに対してギリシアでは、多くの市民は豊かではないとしてもそれぞれ誇り高い自由人です。だからあの戦いは自由人による自由を守るための奴隷の軍との戦いだったのです。ギリシアは勇敢に戦いました。ここからは見えませんが、左手のはるか後方の【3】でアテネの兵士はペルシア軍を撃退しました。オリンピックの競技にもなった種目はこの【3】の戦いを記念してのものです。また右手の【2】の海戦はギリシア人にとっては語り草ともなった戦いでした。

A：本当に【2】を経験した戦士たちはギリシア人の誇りでしたからね。それにしても【2】の海戦勝利の後、アテネの繁栄は目を見張るものでした。Cさん、あなたの指導のもとにアテネは民主制を完成していきました。その当時のことについて何かお話いただけないでしょうか。

C：確かに、当時のアテネは私たちの誇りです。誰でも能力さえあれば国事にたずさわることができる体制になりました。アテネの【4】の頂上に燦然と輝くパルテノン神殿もあの時期に私が再建したものです。

A：ギリシア人が自らを【5】と呼び誇らしく思い、また異邦人を【6】と呼んでさげすむようになったのもあの戦争のあとからではなかったでしょうか。そしてギリシア文化を生み出していったのも、もとはといえばこの美しいエーゲ海でした。ところで、Dさん。さっきから浮かぬ顔をなさってますが、どうしましたか。

D：実は、このツアーを楽しみにしていたのに、Eやヘシオドスが同行しているのが気に入らないんだよ。だいたい彼らは、神々についてありとあらゆる無法な仕業を語ったんだからね。真の神は彼らが言うようなものではなくて、ただ一つで死すべきものどもとは全く異なるものなのだ。

A：まあ、そうおっしゃらずに。Eさんは多くのギリシア人から慕われている民族を代表する詩人なのでから・・・まあ、仲良くお願いします。・・・・皆さん、船はデロス島を通過しました。そしてご覧下さい！前方の遙かかなたにアナトリア（小アジア半島）が見えてまいりました。どうでしょう。Fさん。私はあなたからギリシアの哲学が始まったと思います。あなたこそ、Eさんやヘシオドスさんが伝えたギリシアの神話とはことなる合理的思考をはじめられた方だと思うのですが。

F：いかにも、わたしの「万物の【7】は水」という説こそ、I 神話とは異なる哲学のはじまりでした。それにしても懐かしいね。前方に【1】が見えるよ。私の故郷だよ。

A：Fさんたち【1】学派の方々は、私から言わせると素材という形での【7】を探求なさいました。【1】こそ、ギリシアの自然哲学の発祥の地です。ところで皆さま、船は【1】を右手に見ながら北上をしております。ご覧下さい。左手前方にサモス島が見えてまいりました。サモス島といえばGさん！ あなたはこの島の出身ではありませんでしたか。

G：そうですね、私は【1】学派の方々とは違う考えです。私たちギリシア人は宇宙を【8】と呼びますが、【8】とは「秩序」という意味で、宇宙に秩序を与えているものこそ、数なのです。

A：確かに、Gさんが持ち込んだ数の概念は哲学の歴史に新たな要素を持ち込まれたと思います。あ、皆さま、右手をご覧ください。右手にはエフェソスが見えてまいりました。エフェソスといえば、Hさん。あなたの故郷ではありませんか。あなたは気難しい方ですが、一言で結構ですから何かお話をいただけますでしょうか。

H：私は君たちのような俗物と話などしたくないが、まあ、私の故郷を通過してくれたお礼に、一言だけ。「万物は流転する」この有為転変の世界に秩序を与えるものこそ、私たちが知らなくてはならない大切なことなのだ。

A：確かにHさんの言葉は謎めいて難しいですね。それはそうと、Iさん。何かHさんに言いたいことがおありのようですが。

I：いや、何も言う事なんて無いよ。馬鹿らしくてね。第一、万物は流転するなんてことはあり得ないんだよ。有るものは不変不動、不生不滅、唯一絶対なので、これこそ真の世界なのだ。この世の変化生成は、単なる人間の思いなしにすぎないんだよ。

J：そうですとも先生の仰るとおりですよ。「アキレスは亀に追いつけない」ということを私が証明したのも、雑多な世界がいかに偽りであることを証明するためでした。

A：【9】学派のお二人の主張は、ギリシアの思想界に衝撃をあたえました。多元論者と呼ばれるエンペドクレスさんやアナクサゴラスさんが登場したのも、【9】学派の影響だと思います。そうこうするうちに、皆さん、船はアナトリアの海岸をすぎようとしています。ヘレスポントス（ダーダネルス海峡）を右に見て、左に舵をとってよいよトラキアです。今日ご乗船の方の中でトラキアのアブデラ出身の方がお二人いますね。Kさん。今までの自然についての研究はあなた哲学まで展開すると、現代の自然哲学的な世界観と似たものになりますね。

K：私は現代の自然科学のことはしりません。でもこの世界はこれ以上分割が不可能な【10】の離合集散に過ぎないのです。私たちが今眺めているトラキア地方の美しい海岸も、まもなく見えてくるはずの懐かしい私の故郷、アブデラも、みんな、私たちが美しいとか懐かしいとか思っているだけです。真実の世界は無味無臭の物質である【10】が構成する世界なのです。

L：なんとも味気ない考えだね。同じ故郷の後輩にこんな考えの人間がいるなんて情けないよ。だいたい、私から言わせると自然の研究なんてのはつまらないものさ。人間は万物の尺度だよ。私にとっては自然よりも人間の方が興味があるね。何にしても、世界の果てに美しい何かがあっても、広大な宇宙が驚きに満ちていようと、それらを美しい、とか広大だと感じるのは人間なのだ。人間こそ万物の中心にあるのだよ。

A：Lさんは一般にソフィストを代表する方との評価ですが、今お話を伺っていると、ソフィストについての評判とは違う印象を受けて以外ですね。

M：それはLさんのせいではありませんよ。ソフィストたちが特に悪い評判をうけるようになるのは、【11】戦争が原因ですよ。この戦争はアテネと【12】の対立がギリシアのポリスを二分する戦いになるのですが、私はこの戦争の重大性を思い、是非これは記録に残さなくてはと思いました。だから私は「戦記」を書いたのです。この戦争は本当に甚大な被害を、物心ともにギリシア世界に与えました。とりわけ疫病！①疫病の流行は人々の敬神の精神も奪いました。「それは【13】にすぎない、【14】においては・・・だ」との表現が流行し、今までギリシア人が大切であると考えていた価値の多くが軽視されるようになるのは、とりわけ、この戦争を契機としてでした。Lさんの「人間尺度論」がそのような議論をするソフィストたちの理論的武器となりましたが、それはLさんのせいというより戦争による精神的荒廃のせいでした。

A：本当に、戦争はいつの時代にも人間の心を荒廃させます。戦後のポリスの衰退は誰の目にも明らかになりました。やがて【15】が不気味に勢力を拡大しようとしたときに、それに関してギリシア世界がどのように対応すべきかという点で、議論がおこりましたね。イソクラテスさんとデモステネスさんの間の論争です。歴史を振り返ると、イソクラテスさんのお考えがその後の歴史の真実をついていきましたが、②ギリシアを愛する人々の心は、デモステネスさんに同調せざるをえなかったのでしょう。・・・ちょっとしんみりしてしまいました。皆さま、船はすでにギリシア本土を右手にみながらエーゲ海を南下しております。最終目的地のアテネのペイライエウス港につくまでしばらくの間、この美しい海をご鑑賞ください。なお、ペイライエウス港にはNさんをはじめアテネの人たちが多く皆さまをお待ちしています。そこでは、第二部として、Nさんを囲んでアテネを歩く会が予定されています。ご出席される方はそのまま私どものあとにお続きください。

・・・・場面はアテネの中心からペイライエウス港に続く道にかわる・・・

O : N、N！ 急がないと船が着いてしまうよ。

N : やあ、O。そんなに急がさないでくれよ。アテネの町を歩くのは、僕が毒杯を仰いでいる、本当にひさしぶりなんだからね。

O : N、僕はその点については、ずいぶん心配もし、また、責任も感じているんだよ。何しろ、僕の持ってきた神託が君の人生を大いに狂わせてしまったんだからね。

N : O、君が責任を感じることは何もないんだよ。僕はむしろ、あの神のお告げを受けて自分の使命を知ることが出来たと思って、かえって君に感謝しているくらいだ。僕があの裁判に敗れたのは、むしろ、君の横にいていっしょに歩いている P のせいかもしれないよ。何しろ、彼ときたら③あの作品の中で、僕のことをソフィストと同じように扱って僕を笑いものにしてくれたんだからね。

P : N、もう昔の話はやめにしよう。それに君だって、僕のことを恨んではないだろう。何故って、④君を敬愛するプラトンが「エロース」についてのあの対話篇で君と僕とを同席するように企画してくれて、あの時も和やかに話しあうことができたものね。僕がどうしても言いたかったことは、僕たちの生きている時代が我慢できなかったということなのさ。それに自然を探求する哲学者たちは、僕たちの神をないがしろにして、神の業を自然現象として説明してしまうんだ。

N : その点については僕も同感だな。Ⅱ 僕も若いころは自然の探求に没頭したことがあったけれど、君が言うように、自然の研究には満足的ないものがあったんだよ。もつとも、僕の自然哲学への不満は君が今言った不満とは少し異なるけれどね。それにしても僕が生涯の後半生を生きたアテネは本当に荒廃していたね。正義・勇気・節制なんて言葉はみんな【13】にすぎないということで片付けられてしまうのだからね。

P : 本当に、僕たちの時代は大変な時代だったよ。それは21世紀の時代でも同じような状況だそう。だからこそ、今日は、ギリシアの賢人たちが集まる場所で、君の考えを聞きたいと思ってるんだ。一体、僕たちはどう生きたらいいのかと。君なら何か僕たちのヒントになることを語ってくれると思うからね。

N : 皮肉な男だね。死んでいる僕にどう生きたらいいかを語れというのかい。正直に言うと、僕自身もよくは分からないんだ。でも、⑤ソフィストたちの幸福観や人間のあるべき姿についての考えについては、僕は反対だよ。大切なことは、外見よりも中身、つまり魂をより善いものにするものなのさ。

O : N、ちょっと質問してもいいかい。君はさっき僕が持ってきた神託から君の使命を知ることになったと言ったけど、説明してくれないかい。

N : 僕は日ごろから「自分は本当に知るべきことを何も知らない」と思っていたんだ。つまり、無知の知だね。そういう僕が「人間の中で一番知恵がある」とはどういうことか、と考えたのさ。その時、僕は⑥デルポイの神殿のあの銘を思い出したんだ。そうしたら分かったのだ、⑦人間の知恵がどんなものかってね。それから僕は自分自身の使命を理解したんだよ。でももうずいぶんしゃべり過ぎたようだ。ほらペライエウスに着いたよ。ほらあそこで A 君が手をふっているよ。急ごうじゃないか。

- ① ② どういうことか授業をふまえて説明せよ。 ③ 作品名を答えよ。
④ プラトンのその作品のなかで P は「エロース」の正体を何と言ったか。
⑤ 授業をふまえて説明せよ。 ⑥ どんな銘か。 ⑦ 人間の知恵をどんなものと N は考えたか。

I 神話と哲学の相違を授業をふまえて説明せよ。

II N は「パイドン」の中で、自然の研究についての不満をどのように語ったか、説明せよ。

問 ソクラテスについて授業では何時間かお話をしました。ソクラテスについて知っていることを上の文に語られていること以外に二つあげなさい。またソクラテスについて、あなたの受けた印象を解答欄の範囲でこたえなさい。

- 解答 A アリストテレス B ヘロドトス C ペリクレス D クセノファネス
E ホメロス F タレース G ピュタゴラス H ヘラクレイトス
I パルメニデス J ゼノン K デモクリトス L プロタゴラス
M トウキュディデス N ソクラテス O カイレボン P アリストテレス
1. ミレトス 2. サラミス 3. マラトン 4. アクロポリス 5. ヘレネス 6. バルバロイ
7. アルケー 8. コスモス 9. エレア 10. アトム 11. ペロポネソス 12. スパルタ
13. ノモス 14. ピュシス 15. マケドニア

- ① 戦争が継続するなかで猛威をふるった疫病は、神を敬う人にもそうでない人にも等しく襲った。むしろ罹病した人を思いやる人こそ感染を免れないという状況のなかで、人々が従来大切とみなしていた敬神や節制、勇気などの価値を、単なる人為的なつくりごと（ノモス）として、自然本来のあり方（ピュシス）ではないとする精神的頹廢が蔓延し

た。

- ②ポリスの理想は自由・自治・自給自足であった。ポリスを形成せず王政をとるマケドニアに屈することは、独立をうしなうことであり、ポリスの死を意味するとして、マケドニアと戦うことを主張したデモステネスに、市民たちは共感をおぼえた。
- ③「雲」
- ④「男女（アンドロギュノス）」としてかつては一体だった男女が、失われた片割れを求めることをアリストファネスはエロースと呼んだ。
- ⑤ソフィストたちは人間のあるべき姿を弁論術に秀でていることとした。そのことによって国事に携わり、名誉や名声を得ることが幸福であるとした。しかし、それは他者から「優れた者」と見られることであり、真のアレテー（徳・あるべき姿）とは優れたものと見られること（外見）ではなく、優れたものであること（魂そのものが優れたものであること）とソクラテスはした。
- ⑥ 「汝みずからを知れ」
- ⑦ 人間の中で一番の知恵があるソクラテスでさえ、大切なことを何一つ知っていないことを自覚すること（無知の知）でしかない。それくらい人間の知恵とはみすばらしいものであり、傲慢になってはいけない。

- I 人間の力を超えた驚きの対象である自然を知りたいという点では、神話と哲学は同じだが、神話が人間にとって了解不能な神々を持ち出すことで自然を了解しようとするのに対して、哲学は、世界の中から人間にとって了解できるロゴス（言葉、理性）によって自然の不思議を解明しようとする。神話はいわば完結的で、信じるか否かであるが、哲学は批判を許容することで発展をとげることになった。
- II ソクラテスは「自分が今ここにいる」のは善のためであり、それ故、「善とは何か」こそ一番知りたいことであるのに対して、自然の研究は物質的なめんからしか説明をしようとしなかった。

問 自由記入